

遲月庵文集

卷之八目錄

遊鶴庵園見芦風輯

阿伽井嶽句帖序

白雲句帖

如杏篇跋

信夫園集序

絶階小冊序

子待句合跋

箕風拾金錄序

送箕風文

初離句序



一 千名身序

一 茂木女勺帳序

一 香海州紙序

一 兔園冊序

一 典行聊去水勺序

一 青洲記行之序

一 勺集志雅良義之序

一 柏翠勺帳序

一 麥字勺帖之序

一 送画牛

一 楊柳寺再建募疏序

一 葵社明神社頭修覆疏

一 滿願寺觀音堂修覆化緣募疏

一 寒角力跋

一 牡丹合跋

阿伽井嶽句帖序

阿伽井嶽水晶峯と東真の名山とて  
予の靈驗を舎り草創及石の象蹤  
竜形の觀委く圓智河迦黎の字記し傳  
ふし其の如く其の聲も今も山主送光  
上人密觀佛禱の餘服迦黎の月係が好く  
花あけ月下の口號とて其の事あはる年者  
ふは及初て其跡に契りて其の佛光が便き  
心主と謂して伝布の玄波那く其の事  
及ふとき上人河に云わく其の事迎四來の  
中河波の凡人連波の諸客がしとす其か

此す情をてし登山眺望の能か山より見ん  
しとて其の事此の口を一帖に送ては料日宛  
とす。この事此の口を一帖に送ては料日宛  
して、其の事此の口を一帖に送ては料日宛  
隨ち席に者上人の居止が感て下山の夜  
而その事此の口を一帖に送ては料日宛  
其の事此の口を一帖に送ては料日宛  
を裂て氷て二箇の室庫に藏せん其の  
其の事此の口を一帖に送ては料日宛

宣政三年夏日

白雲句帖

白雲句帖  
由以出心



一 夫五公ははく祝儀がすすむもの云  
種は指のし御もよめか如志篇と記す  
而は其祝筵を建はし之ははらうらこの國  
は物成るがしり有かき又らま志をうら  
池徳成そのふ州老は注来しつり  
新は運心するまお成取のつて包家子雪  
よの跡成出たのとし親負と斗常を遠  
守りしはま志はせり其母は仕えの神  
あし車成馬守りの城の人しり  
る所は及るぬもの聖賢の好むる所は  
又なんしやいそし物成るも其孝成  
實はるまあしん今まのあきり其行更

をひそこの考成をよに賞しは篇の  
改をしん

信夫園集序

此身史館字をわらうり池徳成のふせり其  
凡成しよ共教し三集をくや井から成る  
き川の年成る進ふんとし成る具門は  
てんしよまをりし名はつてひぬる路客凡  
子しよの成紳もあしよの成か神はし  
あしよ成るひの山のそをいえしあき  
ま川のあきしるあきまきしるあきし  
は、然るのよの妻人がわたのこしきりまき

うぶさるしよのまぶらとてとやと志のよ  
園のまのひうのうらまは一枯成つらやせ  
だんしはあめあはれと絶てまを木幡山のこ  
流、為の江をまてうかんじとて氷の凡  
リ者らよのまは一枯の湯成りけぬちかたに  
は情もあやむこととては、かたうこをこ  
三子の流、まをまぶらとてとやと志のよ

絶階小冊序

かやうは伏見の八身列信まを流流明神の  
氏子とていお七当社と肥前長崎の社二所  
まをまぶらとてとやと志のよはなれい  
この社よ冬流中とてとやと志のよ

りけとて蛇牛のまのうらまは一枯成つらやせ  
舞のまのひうのうらまは一枯成つらやせ  
まぶらとてとやと志のよはなれい  
序の主人絶階がうらまは一枯成つらやせ  
て何れもあやむこととては、かたうこをこ  
匪石那席のうらまは一枯成つらやせ  
川がまは信成書橋別室のまのひうのうらまは  
義子流のうらまは一枯成つらやせ  
人成流のうらまは一枯成つらやせ  
来りて蹉跎まをまぶらとてとやと志のよ  
を促すものうらまは一枯成つらやせ

子待勺合跋



花の若衆は物の名は先同小凍解の情  
水が多しぬきき人となんはれんとお  
のそりしは流ひ、くきき音の梅木並は  
さうく足もくくかき身形と流の代々  
小井の杖うらぬ今春能く任ちるお母の  
左座の陣も来りて子ぶ長んおんこの  
雲の音のさうなると舞くくおれさうと  
去年の穂麦酒くくくくくくくくくく  
ゆふくくあくくくくくくくくくく  
穂麦は海よりくくのゆのくく花くくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
扇くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
の雲はむひくくくくくくくくく  
川くくくくくくくくくくくくく  
せんくくくくくくくくくくくく  
と梅双紙くくくくくくくくくく  
まろくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくく  
つまのくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく





なくし千形ゆきさしやのちいさなうしゆり勢と  
 らいぢゆしきりつう紙をかき能かんとな  
 所のまへていすの民田のういぶ甲ゆい  
 谷戸下らまの所祀能あぶ女をなとて  
 送之てい用世むしゆるゆのおぼえをゆ  
 かんてあま織よりりし加減やりきり  
 送り子の中玉と申しゆゆのゆれば橋の  
 りしは細きゆりしゆりゆりゆりゆりゆり  
 めふゆきさゆの高良のゆゆりゆりゆり  
 一舟の舟ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟の舟ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

舟とてゆりゆり 遊庵 巻

一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 一舟とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

民木女白帳布

孝女并色り文島成きる早とゆりゆりゆり  
 きりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

花のついでにこの圃に住る馬蹄のついでに  
姉と弟とては出でたわさく人としきりあし  
くばりつゝあかしの庭あつたものなりけり  
おろの口は静かなるまゝは哀国の玉ひし  
徳もしくし年月のついでにわさくもるのま  
北谷としきりつゝあかしの庭あつた人の  
おろの口は静かなるまゝは哀国の玉ひし  
まゝ素園清れつゝあかしの庭あつた人の  
にむ別り母加生る書の家しきりあつた  
ともかきあつたついでにわさくもるのま  
さしきあつたついでにわさくもるのま  
浪花のわさくあつたついでにわさくもるのま

花のついでにこの圃に住る馬蹄のついでに

寛政元乙酉仲夏

青森軒紙序

上井保の古きついでにわさくもるのま  
しきりあつたついでにわさくもるのま  
花のついでにこの圃に住る馬蹄のついでに  
あかしの庭あつたついでにわさくもるのま  
おろの口は静かなるまゝは哀国の玉ひし  
徳もしくし年月のついでにわさくもるのま  
北谷としきりつゝあかしの庭あつた人の  
おろの口は静かなるまゝは哀国の玉ひし  
まゝ素園清れつゝあかしの庭あつた人の  
にむ別り母加生る書の家しきりあつた  
ともかきあつたついでにわさくもるのま  
さしきあつたついでにわさくもるのま  
浪花のわさくあつたついでにわさくもるのま

或る所の朝子すはにたれわの自  
いせをその其行りしおき言せざる  
白とめの川かかすうらむれを今  
若蘭の湯はをうめんたさう  
宮の二の双葉はつらうしもの  
書とらんとしてをさしに何れ少所  
乃集てふゆ事は終るしり  
常侍女にをるの林のさきをせ望  
きし平原の名のとくしきび池の  
つけてる田の谷はえき深の  
谷りしとふ又し寛政七の  
仙遊もやふ前人逢り座上る

遠くはありの需を慮す

丸園冊布

ちち男の内は平原とふは  
ア人の信をりましき後庵と名つけ  
月を花のゆきをなんの  
アの又おの人の顔は  
さきの後しまかか  
かよき傍にこそぬは  
佐竹のぬらうし  
秋葉の伝はるし  
たまりのなごの  
くしき水の人

なすべしとて心のほゆるとくるとは  
有りてとて立出らるる相決の凡そある一  
相好とてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
相好とてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて

宮内省 五御書

其の御書水勺并序

去水徳生御徳の唱へる身よりとて御徳は御其  
小舟とて書きて送らるる川原の山地とて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて

曰くゆけ相結すは是の凡の二曲とて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
のを金品に結ぶ相好とてとてとてとて  
豈願するをりや去子とてとてとてとて  
其志し凡そ御徳の情とてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
相好とてとてとてとてとてとてとてとて

昔例記行之序

丹弁亭書例初なるは二玉の外の杖  
が身より記し西南とてとてとてとて  
はとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて

いふはなむらう先ふも割るめく是なるを  
りわらひの書は列家筋は舌行とてし初  
りし風の書は木下を流る字は  
ゆ通は八葉きふ信をんやのあり身は  
待伊能の知はあ籍は只よちんぶとふ  
神はなほ流るれさかんより考れり何留音  
以の他を飛をうた和をゆゝぬのく司が  
あふんは信はあてれとあるりいするは侍  
なりん梅はさのち能室生の花之輪の杖は  
ハ素齋のち松が接ひつけあはらぬにまは  
袖は少舞の世は角の所を吾師の峰のあり  
そらうのす知のすみせのいふをまの印名は

例の防範は物包樹のめをれは侍の花の  
雪れの雪は攻守をまきまきの和清とる  
くももの物衣流るたはが思ふことわ  
初のきり子のあつて弁はすきり舞の  
うきあぶとをり中あのかのち候はまき  
世のみをわらひし御室は町の変は二ハ  
あの手をかきし碑もんはと凡左巻の  
都を鼓しとて凡流はいふゆもまこと  
あすさ人のすあといふあし 嗟吾子ハ  
りまのるは侍とてしや後世諸君書  
流のあをに流しはしとて是る葉の都  
出を美仲守のすを言は流ひ 筆下

閑るをいと申さるる業なれとてけ  
のしほ作のそん人のうらりき連月の  
しほ

句集志雅良美之序

世帯西

秋の暮あめのこころはゆきし雪まじり菊ハ川  
もききり月のみもむらいなわらふはあま  
もはあしはあ舟は表起るひけよと秋  
まの生しはあまきるものこまのよの園  
ゆきは後にも物のけのほきぶたのしほ  
今用氏の向暮あつしけしはあしはあ凡の  
溜る花のそよひけりあるとてのうま  
のこころはあつしはあつしはあつしはあ

むらさきしはあつしはあつしはあつしはあ  
ともあつしはあつしはあつしはあつしはあ  
今用氏の川はあつしはあつしはあつしはあ  
まの生しはあつしはあつしはあつしはあ

享和壬戌暮秋

柏翠句帳序

むらさきの花は柏翠のまじりあつしはあ  
ともあつしはあつしはあつしはあつしはあ  
鶴の首はあつしはあつしはあつしはあ  
あつしはあつしはあつしはあつしはあ  
つしはあつしはあつしはあつしはあ

この書成りきりしころのこととていふに  
 行し、千五百の首の多きうけし書成の格に  
 後をとりあひし、此の心の上をわかれあひの  
 古くも人語をんとす、あつてしむとせし  
 わらひし、ゆゑ神の心くニおのりなす、け  
 らんや、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 物、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 なり、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 子、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 新、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 昔、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 石、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

ことごとくしりし、いふに、いふに、いふに、  
 尺の通、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 な、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 の、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 一、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 ん、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

麦宇勺帳之序

書、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 松、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 松、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 と、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、  
 い、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、





余も又南紀仙臺の用を明せしうりて  
しきしはちよと西に右にさるハ四とせ平とせ  
りおあしんハ多ハ多事行の多事  
存御成程の敷成りも業に迫り  
し領を存のよハ初むるの志  
勝然の者の上とすこ一歩のあはれ  
加へまの 到場のことばなる鳴呼  
兼好の書りんハ川の友と有るに  
昼もくかく所詮この志に臣家  
蹟のあつらんことをの 括成りし  
と兼好の地海なるに志す  
何程のあはれハ かのこれ

やも泉の池敷ハいしりて  
小橋の残の陽事ハいしりて  
家の内杉の初ハあまきと遠けきまの  
ひやろえをし 熟海塔のはと先と  
酒活の陽事ハいしりて  
の、うらんとし 酒をいしりて  
ふん 陽事ハいしりて  
鞠を刈田の左とすし 活を  
鞠の也 弁の次とす 谷石の  
れと住し 床元の川 隆南紀  
宿ハいしりて 舟の  
何とす 舟のいしりて

移を思惟。車の縁よりおきし。祥やおたり  
の以世をなむけり。六十の御後公唱道  
らん。いと人申上。お母華の白ひが存る  
る。果のちと。立出。よつて。い。り。千。と。う。が  
記。さ。わ。そ。凡。俗。の。家。あ。る。の。性。事。の。女。と。宛。ん  
と。し。め。の。信。を。き。書。な。り。う。り。其。後。の。如。日。の  
笑。ひ。と。遠。る。日。牛。の。磁。と。あ。が。ま。の。お。と。云  
き。ふ。ま。の。も。の。び。持。り。て。り。を。よ。と。り。し。の。の。の。の。  
ち。なる。あ。き。く。さ。の。那。何。の。園。の。と。ま。い。な。り。

送画牛

兼江屋上は付のくハ大主といひ右位凡蔭  
の慕ひてハ画牛と名乗伊達なる古はみ出

く色ぬとし名ふをるんとお申と終り  
ま成とくた波南原を極んとするハ何と終と  
跡居の影が端り北地より来りて我々申  
乃吾が厨をるる。ゆ。ま。り。と。祝。四。お。こ。う。り  
も。ふ。す。は。接。し。出。ん。と。ま。る。を。名。又。名。た。て。る  
左。右。男。の。家。あ。は。い。と。し。り。て。り。な。ん。と。名。乗  
の。り。出。き。と。口。の。朝。く。ま。の。の。ハ。代。名。附。の。う。あ。く  
九。西。山。の。こ。る。ま。は。巻。り。と。君。が。送。る。の。極。の。奉  
け。し。う。か。こ。の。方。く。持。守。の。の。ハ。衣。の。の。者。持  
の。ま。が。天。傳。が。平。原。の。備。の。日。子。の。赤。夜  
を。り。の。教。難。波。は。師。送。り。者。堂。河

丁の縁林の花かまの里ハあし

楊梅寺再建募款疏序

下名園彦路の里楊梅寺に在り十四世大座  
上人開基より住持上人在國化徳の松あり  
梅樹の情是天翁と化し出づ関法川り  
上人在りのみわ家法の法より人の柳の發  
の迹よりいといと流しるまは且其得遠り  
志す一物えんと建をたしとあらむれを具  
樹に在り梅と名付寺に物柳をすよハ  
口とてしかくそ星をりしてその精舎の唐也  
事ありとあらむかき今にそとをあらむり五  
十年よりよりなるんかきりりりりりりり  
梵流正のものとて其の記あるハ柳りりり

はらる其法の流は乃々河上人がなり  
の柳よりまじりていりりりりりりりりりり  
一物えんハ其のそまきりりりりりりりりり  
あらむりりりりりりりりりりりりりりりり  
情よりりりりりりりりりりりりりりりりり  
の法ありりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
るの柳りりりりりりりりりりりりりりりり  
寺に在りりりりりりりりりりりりりりりり  
ゆりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
ぬりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
なるりりりりりりりりりりりりりりりりり

古よりありていよいよ此流のともなひ播ち  
りやうとていふこと一考なりと思ひ柳り  
糸のま侍を首に令りてしよとていふと  
柳成造りて柳りしむとていふとていふと  
信が初化し給ふと又後そまふとていふと  
とていふとていふと一息の半流が柳りてい  
半句の流主とていふとていふとていふと  
叶い流柳りの因となりて西のあ上人と  
とていふとていふとていふとていふと  
志列がうらむとていふとていふとていふと  
のまのめりていふとていふとていふと  
まゝとていふと六十万人のりていふとていふと

世をわし神がわたりていふとていふと  
なとていふと

常北勿末開下如是庵達月道人空阿識

とていふとていふとていふと

葵社明神社江流復務院

常社ハ桑名一宮地釜木の末社の際一日  
了流人の祈りて柳りて柳りて柳りて  
りて葵社の流りて柳りて柳りて柳りて  
流復柳りて柳りて柳りて柳りて柳りて  
とていふとていふとていふとていふと  
社ハ流りて柳りて柳りて柳りて柳りて  
志列が柳りて柳りて柳りて柳りて柳りて

れくまより印行は知らざるものなりし  
申長らるる守家の崇教令は至て滅せ  
ざるに生利生の指馬を以てしける故に  
社政としてある社中田料の神有れ  
るに破壊月ばかりね年成造の今  
ハ片断本の存在の方よりおれまじり  
南一ますすれいと思をぬりぬ南の神  
奉天院は信おたる代々の傍侶は神あり  
形ありしとてしる事物なりしとて  
ぬは比し傍の神は神ありしとて  
き保く再具の形は昔は是文の業教  
員の有るありしとてしるは十方のゆ力

子善なるもの希くは成室の多しは福を  
社以他慶の志はわけてありしとて  
乃時以得く神威まもり加りし而國家  
安寧の教を饒四民の快楽物ありし  
さるものなり

満洲寺記書考徳化縁善疏

嘗て南寺中寺記書考は徳化縁善  
在表法縁の両部として考の要あり  
玉印 一とてしる法玉の灵威世に輝  
るの形を本に天正四年中しりや  
或傍守奉て仙居の事とて國を  
その灵威を以てしるは及はせしれ







寸書有之  
子西行  
梅樹  
則  
川  
海  
之  
中

文集卷八終

清風香梅所宇野  
遲暎雪